

## 都・建設予定地 生活記 (18)

あまり良く知られていないインドの西・グジャラート州で生活しながら、なんとかこの片田舎を都にしてみようと足掻く僕の生活記。

---

毎朝十時半になるとオフィスにチャイが運ばれてくる。

路上にあるチャイ屋はプラスチックのカップか、グラスで出てくるところが多いが、大学の食堂から運ばれてくるので、いつも紙コップに入っている。そのチャイは、本当に手加減のないもので、ひどく甘い。飲むとかえって喉が渴いてしまうくらいだ。それで、僕はいつも一息に飲む。冷えれば冷えるほど余計にその甘さが際立ってしまうような感じがするからだ。それにファンが全力で回る夏の今、中途半端に残すと紙コップが飛ばされて大惨事になりそう。軽い紙コップで運ばれてきてしまうのだから、一気に飲むより仕方がない。

だが毎日紙コップというわけではない。陶器のカップで運ばれてくることがある。最初はなぜ今日は陶器なのか訝ったのだが、わかってしまえば簡単な理由で、オフィスの前で何かイベントを行っている時は陶器になるのだ。単純に、食堂からオフィスまで陶器を持ってくるのは面倒だが、オフィス前のイベントで近くに陶器のカップがあるなら、紙コップの節約にもなるしそっちを使っしまえ、ということらしかった。

いつも通り紙コップで来る時には、飲み終えたらそのまま近くのゴミ箱に放り込む。本当は置いておけば小間使いが回収に来ると思うのだが、それを待っているのもバカバカしいから。だから最近では、奴らはチャイ時間の後、僕のデスクを確認しない。

だが陶器の時は捨ててしまうわけにもいかないのだから、彼らに取りに来るまで、デスクの隅っこに置きっぱなしになっている。もちろん、取りになんて来ない。来ないまま、出さなければならず、僕自身すら忘れてしまって、そのまま出かけてしまう、なんてこともある。そうすると、もちろん翌朝には片付けられているのだけど、食堂まで持っていくのは面倒らしい、オフィスに置きっぱなしになる。

そんなことが積み重なったからか、それとも毎回紙コップは無駄だと思ったからなのか、最近ではオフィスには陶器のカップが常備されている。そうして紙コップの日と陶器の日がランダムに入れ替わる。最初の頃と違って、もはやどういう理由で紙か陶器かが決まっているのか不明だ（多分、小間使いの気分だが）。

とにかく、紙で来ても、陶器で来ても、僕の行動は変わらない。チャイを一息に飲み干す。陶器のカップだったら、ちびちび飲んでもファンで吹き飛ばしてしまうことなどないけれど、飲み方は変わらない。それは紙コップ時代からの習慣のようなもので、それに冷めているよりは熱い方がずっと美味しいからだ。

ここ、グジャラート州に来て三年目になる。その間、オフィスが移ることもなく、デスクが変わるわけでもなく、ほぼ同じ場所で仕事をしている。紙コップなのか、陶器なのか、それだけは予想がつかないけれど、とにかくチャイは十時半にやって来て、僕は一気に飲む。それは、ほかの人に言わせれば「甘すぎる」とか「まずい」とかで片付いてしまうものかもしれないが、それをどこかで待っている自分も、確かにいるのだ。

---

プロフィール：滝口浩平

2010年から約1年間のデリー留学を経て、東京外大ヒンディー語専攻卒業。色々あって塾・予備校の市進に雇われ、また色々あってインド現地法人 Ichishin India Consultant.Pvt.Ltd 社員となる。更に色々あって日本語教師として Pandit Denndayal Petroleum University (PDPU) で教鞭をとる。第29回織田作之助青春賞受賞。